

10月1日(土)

犬山国際観光センター フロイデ

●やろか水とやろか雨の伝承

—貞享四年八月の木曾川洪水と慶応四(明治元)年五月の入鹿切にまつわる世間話・噂・伝説—

人間生活科学部教授 高木 史人

貞享4(1684)年8月26日、木曾川が氾濫して、犬山城下の「坂下」と称する一帯がみるみる水没した。また、慶応4(1868)年5月13日に入鹿池が決壊して羽黒村始め五条川一帯に大きな被害を及ぼした。人知を越えたこれらの災害に対して、人々は何とか災害の原因を理解したいと願った。そのために発動されたのが、「世間話」であり、「噂」であった。それらの噂は、時を経て「伝説」に昇華していった。近代に入り、これら尾北の伝承を集め研究したのは、旧犬山藩御殿医の二男に生まれた鈴木鐸磨(後に、市橋鐸)である。今回は、市橋の残した資料をもとにして、これらの伝承の、大正から昭和初年辺りのようすを紹介する。